歳時記のある暮らし

二〇二一年《六月》

紫陽花が梅雨の風情を感じさせるころとなりました。

皆様、おすこやかにお過ごしでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき、誠にありがとうございます。

雨に濡れた紫陽花や花菖蒲が目を潤し、水辺ではザリガニやオタマジャクシが活動し、ホタルが川面や草むらを飛び交います。梅雨は水の恩恵を感じやすい季節です。

梅雨入りのことを雑節では入梅といいます、今年は六月十一日が入梅となります。雑節は日本独自の農作業と照らし合わせた暦で、貴族や武家の儀式からきているお正月や五節句などとは別に大切にされてきました。

六月といえば衣替え。制服が冬服から夏服に入れ替わり、学生たちの夏服姿が爽やかに映ります。制服を着ていた学生のころのほうが季節感があったかもしれません。着なくなった服の汚れを落とし、ほころびなどをなおして片付け、暑い季節に快適な服を準備します。衣替えは物を大切にする文化を感じる良い機会ともなります。

あぢさゐの下葉にすだく蛍をば四ひらの数の添ふかとぞ見る　藤原定家

梅雨の黄昏時、夕闇に溶けてゆく紫陽花に、蛍が下葉にやって来て暗闇に花を浮かびあがらせます。明滅する蛍の光を受けた紫陽花の四弁の花びらは、その数を増やしているように見え幻想的な光景となります。蛍と紫陽花が織り成す幻影を見事に表現する句です。

六月の中旬は二十四節気の芒種で、七十二候では「梅子黄なり」といいます。早春に花を咲かせた梅が実をつけ黄色く熟すころです。梅干し、梅酒や梅ジャム作りは梅雨の風物詩。雨の日でも梅の爽やかな香りに包まれて保存食作りができたら楽しいですね。

枇杷(びわ)黄なり空はあやめの花曇り　山口素堂

「枇杷黄なり」は七十二候の「梅子黄なり」と響きが似ていますが、初夏らしいきれいな配色の句です。素堂といえば、「目には青葉 山ほととぎす 初鰹」で有名な江戸時代の俳人で、食べ物についての句が何故か印象的です。枇杷の実は梅雨時に黄橙色に熟すので

(裏へ続きます)

薄暮りの庭も燈が点ったように明るくなります。多汁で甘い枇杷は旬のご馳走です。

六月も終盤に差しかかると一年も残すところあと半分となります。これからの半年をどのように過ごすかを考える良い時期です。昔からこの時期は高温多湿でカビや雑菌が繁殖し、気圧が下がるなどして体調を崩す人が多かったのでしょう。厄を払い心身を清めて残り半年を健康に過ごせるように「夏越の祓」が神社で行われます。夏越の祓では、「茅(ちがや)」という草で編んだ大きな茅の輪をくぐりぬける「茅の輪くぐり」や、自分の身体の悪いところを紙の人形に移して川に流したり、火や水で清めて厄払いをします。

五月雨を集めて早し最上川　　松尾芭蕉

五月雨は旧暦の五月、つまり今では六月から七月にあたりますので梅雨のころの雨です。芭蕉は六月に最上川の川下りを体験したのでしょう。富士川、球磨川とともに日本三大急流の一つ最上川は降り続いた雨によって川は増水し、川下りはスリルがあったことでしょう。

兼好法師も、「最上川はやくで増さる雨雲ののぼればくだる五月雨のころ」と梅雨時の最上川の猛威を詠んでいます。近年、降雨の頻度や短時間の集中豪雨も増加していますので、大雨への備えもしておきましょう。災害から身を守るために、大雨が降る前や風が強くなる前に家の回りの備えや非常用品の備蓄、避難経路についても確認しておきたいものです。

「降らずとも雨の用意」。これは千利休が「利休七則」の中で唱えたもので、「茶は服のよきように」「炭は湯の沸くように」「夏は涼しく冬は暖かに」「花は野にあるように」「刻限は早めに」「降らずとも雨の用意」「相客に心せよ」の七則の一つです。「そんなあたりまえのこと…」と思ってしまいがちですが、わかっていても、できるようでもできないのが人間。利休は、このあたりまえのことが「もてなし」と「しつらえ」を基本とした茶道の根本の全てだというのです。

半年の折り返し地点を機に、より良く後半年を生きるため、健康のこと、感染症への予防や対策のことなどについて、あたりまえのことができているのか、見直しておきたいものです。

気圧や気温の変化が激しい時期です。日々の体調管理にお気をつけください。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社
おもてなし係お手紙担当　久郷直子